
光

夕焼け

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【Nコード】

N52370

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

夏の草原にわたしはいた。その情景に名前はいらない。太陽がちりちりして、夏のおいがして、裸の足で土を踏むその感覚だけ、それだけでいいから。

考えることって、素潜りに似てる。

深いところまでいっぱい潜ると、息が苦しくなる。

だけど深く深く潜ると、そこには歴史の影に沈んできた船と、一緒に沈んだ宝石に触れる事が出来る。

だからつい、潜りすぎてしまうのだけど、もしも沈没船の内部で息が切れてしまったら、二度と生きて戻れない。

腐敗して動かなくなった肉体と、縛り付けられた魂だけがそこに残る。

沈没船の中でそういう人、いっぱい見た。

恐怖心はあるけど、きらきらしたのが好きだから、また潜る。自分はそうなるまい、と心に強く刻んで、また潜る。

いつか、宝箱からはみ出て錆びた銀のネックレスが足に絡まって、ほどけなくなって、浮上する事が出来なくなるんだろうなと思う。

みのもんたの夢をよく見る。

夢の中でみのもんたは、わたしに向かって「ファイナルアンサー？」と問いかける。

もちろんテレビで見るような、あのいやらしい顔つきをして。

わたしはすぐYESと答えるのだけど、またすぐ次のみのもんたがやってきて「ファイナルアンサー？」と問う。

覚悟を問われてるんだなって、思う。

最初は考えるまでもなく簡単に答える事が出来たのに、答えはいつだって変わらないはずなのに、それでも、答えに躊躇が生まれる。

沈黙の10秒。

沈没船。

海底に今も縛り付けられてる人たちの魂。

1000のみのもんた。

警告の鐘が鳴ってる。

それは時に「前を歩く人」の声を借りて、それは時に愛する人の声を借りて、それは時にいつかの自分の声を借りて。

わたしに警告を送る。

「そっちへ行つては駄目だよ」

「違う、そっちでもない」

交差点で二の足を踏んでるうちに、そつとポケットに忍ばせておいた花が枯れる。

花が枯れる頃、ようやくわたしの意識は海底の沈没船から帰ってきて、そこではじめて後悔する。

わたしは十字路の先で手招きをする人の存在に気づく。

「ようこそ、いらっしゃい」と優しげな微笑を湛えてわたしを招く、その人の目は確かに告げていた。

「こつちへ来てはいけないよ」と。

だけど、全て遅すぎた。

無垢だった頃、わたしは草原にいた。

草原がどこまでも続いていて、草原しかなかった。

原風景。

太陽は照り、汗が滑り、淡い耳鳴りがして、夏の匂いがする。

草の匂いも。

だけど影だけが無い。

幼い裸の足でその草原に立ち、最初に沸いた衝動が、きっとこの後悔の最初の出発点だから、わたしは沈没船の奥底で生き絶え、腐り果てる己の結末を理解していながら、破滅を辿る以外の選択を選べない。

通行料代わりに、わたしはポケットの中で枯れてしまった花を差し出す。

彼女はそれを受け取り、わたしを奥へ迎え入れてくれる。

きっと、ここにいる全ての人は、分かっているような顔をして、全てを知っているんだと思う。

だからわたしは、彼女達がしてくれたみたいに、笑顔で「こんにちわ」を返そうと思う。

枯れた花が再び彩を取り戻す事はもう無いのだけど。

最終章には逃れようの無い悲劇が約束されていても、そこに至るまで、喜劇にする事は出来る。

笑いながら生きていたいと思うし、誰かの笑顔にふれたいと思う。
たとえばここが腐敗に満ちた死の森であっても。

きっとこの世界に魔法は存在しないから、わたしはわたしの手が届く全ての物質的な原理に頼って、奇跡を手繰り寄せてみせる。

だって、あの日の太陽光は、こんなに深い海底に沈んだ船にまでとどいてる。

影という犠牲を必要としない「ただの光」が。
そこにかざす手がどれだけ汚れていても、まるで魔法のように美しいかたちに変換して映し、心を誘う光。

間違いをする覚悟ができた。

ファイナルアンサー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5237o/>

光

2010年10月26日11時13分発行